みんなで

のりこえよう通信

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　校長室から

令和　2　年　9月　30日　　NO.20

一局の将棋

高校生の将棋の棋士が話題を呼んでいます。藤井聡太二冠。

　最年少でタイトルを取ることも凄いのですが、あの羽生九段を簡単にやっつけることが、私のようなオ－ルドファンからすると、凄すぎます。

　かつて、羽生九段が登場してきたときのショックが今も残っているのかもしれません。

　羽生九段が高校生で颯爽と現れたときの名人は谷川浩司九段でした。「光速の寄せ」と恐れられ、終盤の大逆転で棋界の最強者でした。

　その谷川九段が面白いように勝てなかった相手が当時高校生の羽生九段でした。

　谷川ファンの私としても何度も苦渋を味わいました。でも、第55期名人戦は、今でも時々将棋盤に駒を並べて鑑賞します。第一局が堺市で開催されたこともあるのですが、谷川九段が羽生九段に勝ち、永世名人の称号を手にした戦いだから。

　いずれにしても。将棋のプロの凄いのは、戦いが終わった後、初手から最終手まで覚えていて、感想戦で並べなおすこと。途中必ず「ここでこう指すと」と言うと、こんな言葉が返ってきたりします。「それは、それで一局の将棋ですね」と。

　この「一局の将棋」っていう言葉、意味が深くて好きだなあ。

「あの時、歩を打っていたら」「あの場面で、王手していたら」とか。

一つの場面での決断が、その後違う将棋になっていたという含みがあります。

　まるで「あの時、出会ってなかったら、どうなっていたのか」とか「あのとき、少しがまんしていたら違う人生になった」、なんて読み替えたりできるじゃないですか。

一局の将棋。一度きりの人生。時間だけが静かに流れています。